

岩崎吉一先生7回忌法要に寄せ

いのち
武内光仁「我 生命ある限り」個展

前衛土佐派事務局／新象作家協会会員

企画・美術評論家 中野 中

期間・2000年6月13日(火)～27日(火) (会期中は休みません)

6月13日(火) 午後4:00よりピアニスト鈴木淑子氏・オカリナプレーヤー本谷美加子氏の演奏
土佐酒(樽酒)・土佐の珍味でのパーティーにぜひお越し下さい。

場所・GH ギャラリー ホシヤ

〒110-0002 東京都台東区上野桜木1-4-7

☎03-3822-0330



向後を問う総括と展開

—武内光仁個展に寄せて—

武内光仁氏の、ことに近年の仕事ぶりには瞠目に値すべきものがある。私は武内氏に面晤を得てわずか四年足らずだが、このわずか四年の間に連続的に、かつエネルギーに制作され、発表されてきた作品は、いっそうの深まりをみせ、ますますの拡がりを展開している。

武内氏は生命、生きるということを根底的テーマとする。心と肉体が緋い交ざり葛藤し煩悶し格闘する。個が社会性を持ち、自然と人間との共存共棲への課題となり、人類の歴史もが視野に入り、宇宙へ到る。そして再び個に収斂する。輪廻にも似た根の深い広大無辺のテーマを一貫するのが掌(指)のモチーフである。

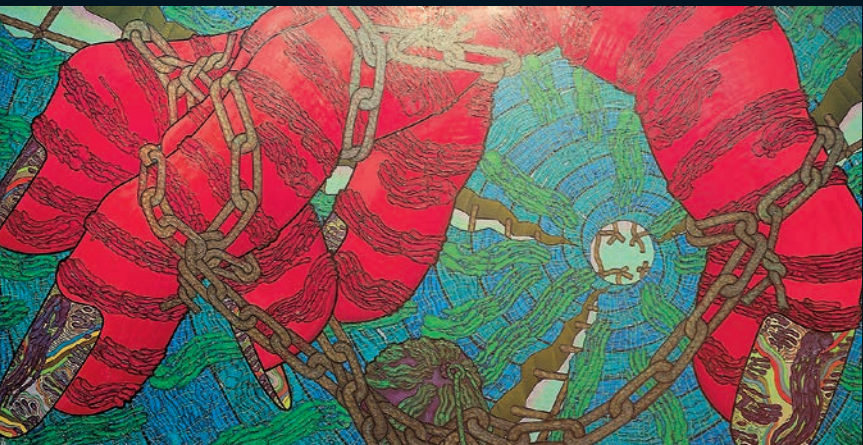
掌(指)とは何か。それは生きて在る証であり跡であ

美術評論家 中野 中

る。生きて在ることのすべてが掌の相となり指(指紋)は個そのものである。すべては個(己)の内実に向かい、そして外へ向かって放射する。そこにミクロとマクロが同居共存することになる。結果、作品は深さと拡がりとダイナミズムを共有する。

放胆な視点・発想、緻密な思考回路が、発表のたびごとに意外な驚きと説得力を持つことになる。

今回は、故星谷氏の好意により同ギャラリー全館を使い、晩年の岩崎吉一氏の推挽への一つの回答を出そうとする心意である。総括と新たなる展開がいかなる様相を呈するか。21世紀の武内光仁氏の仕事を厳しく問う又とない機会となろう。(2000年5月6日 識)



北の門 1.8×3.6m 油 (楯ベニア)



南の門 1.8×3.6m 油 (楯ベニア)



在りし日の岩崎吉一先生 30号S

武内 光仁

●アトリエ

〒783-0058

南国市白木谷36

☎088-862-3513

●自宅

〒780-0927

高知市山ノ端町190-5

☎088-872-1903

土佐という「南の国」で生を受けた私はいつも血をたぎらせ、ひたむきさを忘れてはならぬ、懸命に生き抜かなければならぬ、と思いつけて参りました。そんな私の“来し方”には、強烈な感動を受けた「出会い」が何度かありました。

その中には、前衛土佐派主幹濱口富治先生との巡り合いがあり、私は土佐派の事務局を担当。アヴァンギャルド、前衛の領域での仕事を見、聞き、体験して、芸術は他の何にもまして苦しいけれど、実はこの生命を賭けても悔いのないものだと思いました。

今回の個展に身に余る企画・推薦文を頂戴した美術評論家中野中先生との出会いもまたそうですが、ほかに、もう一つ、私のその後の人生に決定的な影響を与えてくれた素晴らしい邂逅、出会いがあります。

故・岩崎吉一先生。

当時、東京国立近代美術館次長で気鋭の美術評論家でもあった先生は、ご逝去の一年前、私の作品をご高覧になり、高く評価し、その展覧会で最高の賞を授与

してくださったのです。

この一年後に先生は亡くなられ、ついに、お目に掛かる機会がなかったのは残念の極みですが、しかし、ご逝去までの短い間、先生は私を地方在住の「最後の弟子」として折に触れてご連絡をくださり、右も左も分からない私を導いてくださったのです。

先生、逝かれて七年。その法要を機に、天の先生に見ていただきたいと個展を決意しました。先生の評価が恐ろしくもありますが、ここに並ぶ作品群は土佐という辺境の地に住みながら懸命に頑張った私の、精いっぱい「姿」でもあり、この歳月の「報告」でもあります。

しかも、今回の個展開催を大変、楽しみにしていただき、大変なご協力をいただきました故星谷善男氏のギャラリーでの開催です。今年の一、彼岸に旅立たれた星谷氏は岩崎先生と同様に私に素晴らしい思い出を残してくださったのです……そんな様々な出会いに支えられた私の新たな「節目」の個展を、どうぞ、心ゆくまでお楽しみ下さい。